

いろみずけんきゅうじょ

この実践は、「4歳児と5歳児が、身近な材料で遊ぶ色水作りを楽しむ過程で、子どもが様々なことに気づき、試し、探究へとつながる事例」です。子どもの思いに添った、保育者や保護者の関わりが、子どもたちの興味や探究の広がりへと続く体験の豊かさを支えています。色水遊びは、実践されている園が多い事例の一つです。子どもの自由な発想で展開し、探究へと体験が深まるには、保育者の丁寧な見取りと、子どもの思いに寄り添った環境や保護者との連携の工夫がいかに大切であるかが事例を通して伝わってきます。

南陽市立赤湯幼稚園

4・5歳児

事例 1. 魔法の色水作り

場面 1. 年長さんみたいな色水やってみよう

- 子どもたちは、ままごとの皿やフォークを使い、紙テープを指でちぎりながら水と混ぜ合わせる。
- 「どうやって作るの?」「教えてあげるね」「ベトベトするー」「のりみたーい」「なんで溶けるんだろう?」など、子どもたちは、感じたことを言葉で伝え合い、楽しむ。紙テープをいろいろ混ぜて楽しんでいたら、予想もつかない混ざった色になり、「**なんでだろう?**」と疑問や気づきが生まれる。色水をとっておく入れ物が必要になり、ペットボトルを家から持ってくることになる。

4月

○保育者の援助 ●環境構成

○子どものやってみようの思いに寄り添う。
●一緒に必要な用具や材料を準備する。

- 遊び方を教え合える場を作る。考えたり試したりが楽しめるように、場や時間や材料を保障し、一人一人の取り組みを認める。
- 「違う紙テープも入れてみたらどうなるかな」と、さらに考えたり試したりする姿を見守る。



場面 2. 次の日、魔法の水ができるのは?

- ペットボトルに紙テープを入れて振ってみる子ども…「できた!!!」「振ってもできるよ。僕が発見したよ!」と、友達に教えたり、聞いたり、真似したりする。
- 初めに作った色水に違う色を混ぜて、色の変化を楽しむ。色が少しずつ変わり、友達の色と比べるなど、混色にも関心が高まった。さらに、**混色による色の変化や光の反射への関心**をもつ。
- 「年長さんがやっていたマーカーの色水作りやってみよう!」「先生、見て! **ここ(横)から見るとブドウ色、ここ(上)から見ると抹茶色!**」と、Aさんが発見する。自分たちの発見を伝えなくなった子どもたちは、「小さい子にも見せたい!」と、みんなが見られる場所を考え合い、玄関ホールに置いた。
- 子どもたちは、他の入れ物でも同じようになるかを試す。
 - 1、円柱の瓶・・・できた
 - 2、違う形のペットボトル・・・できた
 - 3、浅型の入れ物・・・魔法にならない
- 「**(魔法の色水ができるから) ペットボトルに入れた方がいい**」「1つじゃなく、いっぱいの色を入れたらできるよ」「**こういう風に染めるとできるよ**(カップに何色も描いて水を入れる)」と、自分の発見や気づきをみんなで教え合う。「オリジナル魔法の色水作り」は翌日も続いた。家に持ち帰ったり、家で作って持参したりする子どもが増えた。

- 「すごい!大発見!」など、子どもの心に寄り添う声かけをする。

- 周りの子どもにも知らせ、関心を向ける。
- 「どうやって作ったの?」「なんでだろうね」「魔法の色水みたい!」と認める声をかける。
- 子どもの思いに寄り添い、掲示する場を設ける。

- 別の容器でも試せるよう、形の違う容器を準備する(高さの違う円柱の入れ物、形の違うペットボトルなど)



事例 2. 「いろみずけんきゅうじょ」

場面 1. 「いろみずけんきゅうじょ」のはじまり!

4月28日

- 色水作りを楽しんでいた5歳児が、自分たちで、「けんきゅうじょ」の看板を作り、保育室入り口に貼る。
- ある日、Kさん、Sさんが、「色水、凍らせてみたい…」と、伝えにくる。保育者が、その方法を尋ねると、「お家に持って帰って凍らせてきたい!」と言う。降園時、自分たちでやり方を考えたので、迎えの保護者に凍らせたいことを言葉で懸命に伝える(保護者も快く応えて、子どもたちのワクワクドキドキ「やってみよう!」の気持ちをつなげてくださった)。

○子どもの気持ちを汲み取り、降園時に保護者に伝え、協力をお願いする。



場面 2. 凍らせて発見!

5月11日

- ・「先生、見て!」「凍らせたら色が分かれたんだよ!」と、発見を嬉しそうに教えてくれたKさん。続いて登園したSさんも、凍らせたペットボトルの容器を保育者に見せながら、「色が真ん中に集まってるんだよ!」と、友達と見せ合い、違いを見比べている。「なんで色が集まるんだろう?」と、他の子どもたちも関心をもち、「真似してやってみたい!」と、家に持ち帰る。凍らせて、同じように色が集まることを確かめる。

場面 3. 溶けた氷は…?!

5月15日

- ・家で色水を凍らせてきたBさんが、ペットボトルの表面の変化に気づく。「あれ?! 濡れてる…?! 朝はあんまり濡れていなかったのに! 真ん中の色が溶けてきてる!」

場面 4. やってみよう!

5月16日

- ・色水が溶ける様子を見ていたHさんが、溶けた水をカップに入れ始めた。中心の色の付いた氷がどんどん小さくなっていき、透明になることに気づき、「色の変化を試したい」と言う。
- ・午前中に、最初に溶けた水を紙コップに入れた。そして、降園前に、さらに溶けた水を紙コップに入れた。「最初の水と比べたら、薄くなってる!!」と、Hさんは、自分の気づきを発表タイムでみんなに伝えた。

場面 5. 本当かな…?

5月17日

- ・Aさんが凍らせた色水を溶かし、Hさんと同じように試してみる。「本当だ! 最初の方が濃い! でも、最初は青い水だけど、次のは紫っぽい…」
- ・「発見したことをみんなに伝えたい!」と、発表タイムや発見ボードで伝える。そして、友達の気づきを自分の遊びに取り入れて試すことを楽しんだ。
- ・友達の発見や気づきが刺激となり、さらに、新たな発見や驚き、疑問が生まれた。また、色を比べたり、観察したりなどの遊びが続いた。

○「すごい! 大発見! Kさんが凍らせてみたい! ってやってみたら分かったんだよね」と、受け止める。

●二人の気づきを周りの子にも伝える(話し合い・発見ボードなどで)。



○「どうしてだろうね?」と、考えを引き出したたり、性質を分かりやすく伝えたり(水を凍らせると他の物質を押し出そうとするなど)、より興味がもてるようにする。

●子どもの疑問に保護者が応えてくださったことに感謝する(親子でネットで調べる、家で凍らせて一緒に思いを共有する)。



●「いろみずけんきゅうじょ」の発見や気づきを掲示し、子ども同士の共有や、保護者にも伝える場とする。また、保育参観で実際に見ていただけの機会を作った。



いちご組 いろみずけんきゅうじょ の もっと! やってみよう!



【考察】 友達の発見や気づきが刺激となり、「発見」「驚き」「疑問」が溢れ出した。色を比べる、凍らせる、さらに溶かすなどで探究する姿に、体験の深まりを感じる。

子どもの言葉や心を「感じる心」でキャッチし、実現につなげるための、援助や環境構成を心掛けた。また、子どもの気づきや探究する心を、クラス便りや掲示物で発信したことは、保護者の保育への理解につながった。保護者が、子どもの「やってみたい!」ことが実現できるように寄り添い、援助したことで、「科学する心」がさらに育まれた。同じ色水遊びを通して、4歳児、5歳児それぞれの発見や気づき、見方や考え方の深まりの違いが見えてきたことは、保育者が今後、遊びや育ちをつなぐ際の援助の工夫に展開できると考える。遊びがより充実し、楽しめるよう、教材の研究や提示の仕方を職員で考えていきたい。

年齢やクラスの枠を越えて、4歳児が5歳児の色水作りに刺激を受けて取り組んだことは、憧れをもつことにもつながった。また、掲示物から刺激を受け、他の学年にも遊びにつながったことは、「科学する心」が園全体に広がっていることの現れと考える。身近なものに関心をもち、ワクワクドキドキを感じ、感じたことをみんなで共有しようとする姿は、物事への関心(出会い)から、「科学する心」が育まれていると考える。子どもの「やってみたい!」意欲は、次の遊びへの広がり、探究する心につながっている。